

【やしき】

ぼくの小学校に、みんなから「やしき」と呼ばれているこどもがいます。

本姓が「屋敷」なのではなくて、いわば愛称です。

どうしてそういう愛称が付いたかというのと、その「やしき」くんが住んでいるのが、お化け屋敷だからということです。

あいまいな言い方をしたのは、それが噂だからで、それでもかなり信憑性（しんぴょうせい）の高い噂だということで、それならみんなで、学校帰りに、

「やしき」くんの家に行ってみようかということになりました。

もし本当にお化け屋敷なら、本物のおばけごっこができるかと踏んだのです。

みんなといっても、「田貫」くんと「木恒」くんと、ぼくの三人だけなのですが。

なまぬるい怪しい風が吹く日のことで、お化け屋敷探検にはもってこいの好日でした。

「なにしろ、やしきくんのお化け屋敷には、百のおばけがいるそうじゃから、楽しみじゃ」

と田貫くん。

「その百のおばけの三分の一は、人を食うそうじゃから、楽しみじゃ」

と木恒くん。

百の三分の一はいくつかな、と計算しながらぼくは、その百とか三分の一に、やしきくんは入っているのか、いないのか、なんてことをかんがえていました。

「おばけが百もいるお化け屋敷じゃから、でっかいんじゃろなあ」

と田貫くん。

「そんなこと当たり前じゃろが。この村一番の豪邸じゃ」

と木恒くん。

「とにかく村一番のお金持ちじゃから」

と田貫くん。

「村長の百倍の財産があるんじゃ」

と木恒くん。

それにしても、やしきくんの着ているものはいつも粗末で、まるで乞食の子のようじゃが、とぼくはおもいながら、そうか、あれは「人目を忍ぶ仮の姿」というやつか、と決めつけました。

なんじゃかんじゃ云っていると、生臭い風が吹き始めました。

みんなで、こわがって、

「うひゃひゃ」

とか、ふざけていると、やしきくんの家に着きました。

けれども、そこは豪邸どころか、まったくのあばら家で、壁は崩れ、扉は壊れ、障子は破れ、つまりは四方八方まるみえで、百どころか、一つだって、おばけなんかの隠れる場所がない。

「あじゃば」

と田貫くん。

「げろげろ」

と木恒くん。

そのとき、やしきくんも学校から帰ってきて、

「よく来たね、君たち。こんな所だけど、せっかくだから、どうぞ入りたまえ」

三人そろって、

「おじゃましました」

と帰ろうとすると、やしきくんは、ふたつの目玉を赤鬼よりも真っ赤にさせて、

「君たちを失望させたみたいで、済まなかったね。お詫びに、ご馳走するよ。お化け屋敷だって、のっぺらぼうが作った饅頭と、ろくろっ首が作ったうどんと、蛇女が作ったまむし茶くらいは、いつだって出せるからさ」